

物語論的自己分析ツール作成の試み： 女子大生のキャリア支援のための基礎的研究

西村 純一*，平澤 尚孝**，福本 俊***，
堀田 千秋****，佐久間 香子*****，吉田 滋子*****，井島 由佳*****
(平成 22 年 10 月 7 日受理)

A Study of the Self-Assessment Tool in Self-narrative Style: A Basic Study for Career Support for the Students of A Women's College

NISHIMURA, Junichi HIRASAWA, Naotaka FUKUMOTO, Shun
HOTTA, Chiaki SAKUMA, Kyoko YOSHIDA, Shigeko and IJIMA, Yuka
(Received on October 7, 2010)

キーワード：女子大学，1・2年生，キャリア支援，自己分析，自己物語，内容分析，多重応答分析
Key words：Women's college; freshmen and sophomores; career support; self assessment; self narrative; content analysis; multiple correspondence analysis.

問題

最近，大卒者の就職率は極めて厳しく，就職氷河期の再来といわれている。そのため，在籍しながら専修学校に通うダブルスクールや大学卒業の手続きを取らずに留年して就職活動を継続する「就職留年」も少なくない。しかし，せっかく就職しても3年以内に3割以上が離職しており，大卒者の進路意識・目的意識の希薄化が問題になっている。また，大学院への進学や起業なども増加しており，大卒者の進路が多様化してきている。そのため，各大学では卒業時の出口指導を改め，入学時から卒業時までのキャリア支援に切り替えたり，キャリア教育関連の授業科目を増やしたりしてきたが，大学設置基準が改正され，来年度からキャリア教育が全大学に導入されることになった。

渡辺（2009）によれば，「キャリア教育は，キャリアについて教育することでもなければ，就職の準備を必修にして4年間かけて行うことでもない。キャリア発達の促進という視点に立って，教育活動全体を見直す運動である。」また，キャリア発達の視点に立つとき，「大学時代の発達課題は，高校卒業時の暫定的選択（仮の進路決定）という発達の課題の達成を土台とし，選択した進路（専門領域）

の中でできるだけ新たな諸体験の価値づけや意味づけを累積するための行動と態度を発達させることで，次段階の課題である『社会人としての自立』に向け，実際に進路選択し，自立していくことである。大学生のキャリア構築とは，専門領域を自分の視座として獲得し，自己確立することで，学校から社会への移行を達成することである。」

大学生がそのように自己を確立していく上で，自己分析による自己理解が重要である。そのために，各大学のキャリア支援のステップをみると，1・2年生の比較的早い段階の支援として自己分析が位置づけられている。例えば，早稲田大学キャリア・センターでは，①これまでの人生を振り返り，キャリア・ライフプランへの意識を高める。②自己分析し，自分の価値観を明確にする。③実際の経験を通して，自分の興味・能力を検討する。④具体的に目標設定する。またはそれに向けて情報を収集する。⑤就職活動・進学準備等，その目標を具体化するために行動する，という5つのステップがあり，自己分析は第2ステップから第3ステップに位置している。また，京都女子大学では，①夢や目標を育む，②職業観を育む，自己理解・キャリア・ビジョンの形成，③インターンシップ，④自ら考え学ぶ力を育む，⑤自己表現力を育む，の5段階であるが，自己分析（自己理解）は第2段階に位置している。このように多くの大学では，最初にキャリアに対する意識を高めるステップがあり，それに次ぐステップとして，自己分析による自己理解が用意されている。意識を高めるというステップはウォーミングアップのようなものなので，本格的なキャリア支援のスタートは自己分析からであるといえる。

本研究に際し，我々は，アメリカの大学のキャリア・センターにおける自己分析ツールの活用状況について視察を

* 心理カウンセリング学科産業心理研究室
** 短期大学部保育科心理学研究室
*** 日本女子大学家政学部児童学科
**** 心理カウンセリング学科
***** 災害医療センター精神科
***** 新橋アサイクリック
***** 家政学研究科博士課程

行ったが(本論末を参照されたい), アメリカの大学のキャリア・センターにおいても, おおむね自己分析が最初のステップとして位置づけられている。

ハヴィガースト(Havighurst, R. J., 1953; Havighurst, R. J., 1972)の発達課題によれば, 人生の一定の時期に生じる発達課題をうまく達成することが幸福とそれ以後の課題の達成を可能にし, 他方, 失敗は社会からの非難と不幸をまねき, それ以後の発達課題の達成を困難にする。このような観点からすると, 大学の1・2年の初期段階における自己分析という課題の達成が, その後のステップにさまざまに影響するという意味で, きわめて重要である。そのような意味で, 本研究では, 学生のキャリア支援における自己分析の在り方に関心がある。

これまでの自己分析では, 特性論的な自己分析ツールを用いる(図1)。この自己分析ツールには, 価値特性, 興味

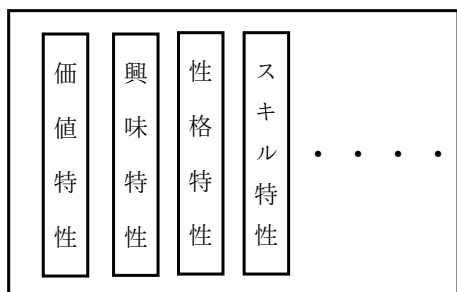


図1 自己分析ツール

特性, 性格特性, スキル特性などを測定するツールがいろいろあり, その中から関心のあるものを選んで実施する。そこで, 得られたいくつかの特性尺度のプロフィールにもとづいて自己の特徴を理解することになる。自分でできる程度のツールもあるが, より専門的なものについては, 専門的なカウンセラーの助けが必要である。こうした特性論的自己分析の特徴は, 各種の特性が寄木細工のように使われ, それらの特性によって要素的・構成的に自己像が描かれるという点である。人間全体として理解するわけではなく, その人間の相対的特徴をいくつかの断片的特性から推測するにとどまる。また, こうした特性論的自己分析の特徴は, 現時点という一定の時間に切り取られた静止画を分析するようなもので, そこには過去や未来とのつながり, あるいは過去から現在への変化, 現在から未来への変化を窺うというような視点は含まれていない。これは, キャリア発達のようなダイナミックな変化を考えるためのツールとしてはきわめて不十分であると言わざるをえない。

最近のアメリカの大学のキャリア・センターを視察した印象であるが, そこで使われている自己分析ツールは大体似かよっており, 基本は価値特性, 興味特性, 性格特性, スキル特性の心理検査およびそれらを補完するワークシ

トである。GATBのような適性検査はあまり使われていない。興味検査は日本ではホルダのVPIが良く使われているが, アメリカでは古いがストロングの興味検査が存外使われている。また, 性格検査としては, MBTIが幅広く使われているという印象がある。しかし, 近年, 従来の検査に代わるような新たな検査は登場していない。また, 特性論に基づいて何か新しい検査を開発しようという気運はまったくといってよいほど感じられなかった。他方, それぞれの大学のキャリアセンターではより簡便なワークシートが種々開発され, 活用されていた。

そこで, 本研究では, 従来のフォーマルな心理検査ではなく, 日常のキャリア支援の相談のなかで気軽に使えてしかもそれなりに有効な独自性のあるワークシートを開発することを目標にしている。また, そうした新たな自己分析ツールを開発するにあたって, 本研究が大切に考えたコンセプトは, およそ次のような点であった。①渡辺の指摘にもあるが, 大学時代の発達課題は, 高校卒業時の暫定的選択(仮の進路決定)という発達の課題の達成を土台としている点に留意する必要がある。そこで, 本研究では, なぜ今の大学・学科を選んで入ってきたのか, 入学の経緯をふりかえらせるということを, 一つの重要な作業として盛り込むことにした。②渡辺の指摘にあるように, 大学時代の発達課題においては, 選択した進路(専門領域)の中でできるだけ新たな諸体験の価値づけや意味づけを累積するための行動と態度を発達させることが重要である。そこで, 本研究では, 次の作業として, 入学以降の学修状況を振り返らせることにした。③また, ②では専門を軸にして, 資格等を含めていかにして学修を進めているかを問うているわけであるが, 本研究ではさらに重要なこととして, そうした学修状況を本人がどのように自己評価しているのか, 現在の自分自身のありようについての評価作業を盛り込むことにした。④最後に, その上で, 次段階の課題である『社会人としての自立』に向け, どのような夢, 目標を持っているか, 将来の望ましい自己像について語らせる作業を盛り込むことにした。

また, 本研究では, これらの作業を一つのワークシートにまとめるにあたって, 時間的な流れに沿った一連の文脈的な作業として構成した。その検討に際して, 榎本博明(2009)の「パーソナリティの物語論的把握」が示唆的であった。「……そこでは, 『自分とは何か』という問いは, 『自分はどのような生き方をしているのか』という問いに形を変える。自分を振り返るには, まず自分はどんな人生を送ってきたかを振り返ればよい。そして, この先どんな人生になるだろうか。自分はどんな人生を送りたいのだろうかといったことを具体的に考えてみればよい。」また, 「自己を語ることに, さまざまな経験を時間軸上に位置づけることによって, 過去から現在に至る自己形成史

の流れを理解し、その延長に未来を展望することを可能にする機能がある。そのおかげで個人の人生に一貫性や統合性がもたらされる。」(榎本, 2008)。

したがって、本研究では、図1に示すような伝統的な特性論的自己分析とは異なり、図2に示すような自己物語的自己分析を採用している。物語論的視点の自己分析の特徴は、榎本が指摘するように、過去から現在に至る自己形成史をふりかえるとともに、その延長に未来を展望するところにある。そして、そのことによって、個人の人生に一貫性や統合性がもたらされるという点にある。このような自己分析は、高校卒業時の暫定的選択(仮の進路決定)という発達の課題の達成を土台として、選択した進路(専門領域)の中でできるだけ新たな諸体験の価値づけや意味づけを累積するための行動と態度を発達させ、そして次段階の社会人としての自立を考えるという大学時代の発達課題に取り組む上できわめて有効であると考えられる。また、物語の特性として、過去から未来へという一方的な時間の流れだけでなく、逆に現在から過去を振り返ったり、現在の学修状況と未来とのつながりを考えたり、時間を超えてダイナミックに考えることができるという特徴がある。

しかし、こうした物語論的自己分析の大学生のキャリア支援における有用性については、これまであまり検討されていない。そこで、本研究では、物語論的自己分析ツールの有用性を検討すべく、1・2年生の女子大生を対象に、大学に入るまでの経緯、現在の学修状況、今の自分、将来の自分についての自己物語を書かせ、その自己物語のパターンを分析して、それが1・2年生の女子大生の自己理解にとって重要であることを示す。しかし、そうした分析のすべてを本論文のなかで果たすことは無理があるので、本論文では、学生は「現在の自分自身」について書かせたときに、いったい何を書くのか、そしてまた、それは何を意味しているのかという問題を中心に検討することを目的としている。いま一つ、こうした自己物語は、パーソナリティの表現であり、自己物語のパターン特性はパーソナリティ特性と一定程度の相関をもつという仮説について検討する。

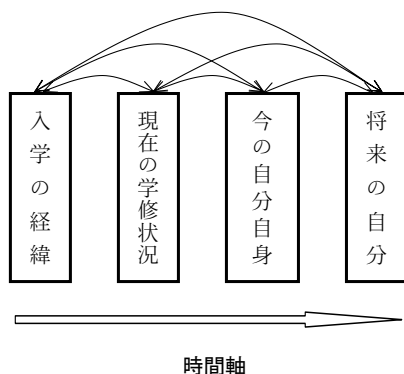


図2 物語論的自己分析

2. 方法

調査対象者 本研究では、1・2年の女子大生を対象としている。そのためにA女子大学のB学科の1年生94名とC学科の2年生114名、合計208名を調査対象とした。なお、自己物語ワークシートは男子学生や他学科の学生にも適用可能であるが、自己物語のテーマがあまり分散しないように、本研究では特定の大学の特定の学科の女子学生を対象を絞っている。

調査内容 本研究では図3に示すような自己物語ワークシートを作成した。実際にはB4サイズで余白が十分にとられている。

ワークシートは、自己物語の意義を理解した上で作業に取り組んでもらうため、ワークシートの冒頭に榎本(2008)の自己物語の説明が書かれている。これを読み、実施日、所属学科、学籍番号、氏名を記入したのち、以下の4つの質問に自由記述で回答してもらった。

- ①大学・学科を受けることになった経緯
- ②学科の中で何をどのように学びたいか
- ③今の自分自身をどのように思っているか
- ④こんな風になっていたらいいなという自分の将来像

このほかに、NEOの5つの尺度(N=情緒不安定性、E=外向性、O=開放性、A=協調性、C=誠実性)、TEG IIの5つの尺度(CP=批判的親、NP=養育的親、A=成人、FC=自由な子ども、AC=順応した子ども)についても測定した(柏木, 1997; 辻, 1998; 東京大学医学部心療内科TEG研究会, 2006)。

調査手続き 自己物語ワークシートは、B学科の1年生ならびにC学科の2年生の心理学実験実習の後期の授業の終了後の時間に、調査の趣旨(大学生のキャリア形成支援の基礎的資料として研究する)とやり方を説明し、実施した。また、NEOとTEG IIは、心理学実験実習の授業の一環として授業中に実施されたものである。自己物語ワークシート、NEOやTEG IIの尺度得点に関しては個人情報であるため、内容分析、統計的分析後、全体的な結果についてフィードバックするとともに本人に返却した。

調査時期は平成21年10月から12月。

データの分析手順 質的研究に習熟した2名によって自己物語ワークシートの回答の内容分析(有馬, 2007)が行われた。分類しにくいところについては、ふたりで協議しながら行った。当該のカテゴリーに関する記述の有無によって1, 0データ化し、PASW Statistics 17.0により多重応答分析(石井, 2001)を行った。また、多重応答分析の結果抽出された次元とNEOとTEG IIの各尺度との相関の有意性の検定を行った。

自己物語について

検査日： 平成 年 月 日

学科 学籍番号 氏名

自己を語ることは、さまざまな経験を時間軸上に位置づけることによって過去から現在に至る自己形成史の流れを理解し、その延長に未来を展望することを可能にする機能があります。そのおかげで個人の人生に一貫性や統合性がもたらされるといわれます。ここではそうした意味で自分自身を振り返ってみましょう。

Q 1 あなたは、どのような経緯で、〇〇大学の△△学科を受けることになりましたか。

Q 2 あなたは、△△学科の中で何をどのように学びたいと思っていますか。

Q 3 あなたは、今の自分自身をどのように思っていますか。

Q 4 あなたが「こんな風になっていたらいいな」という将来像について書いてください。

図3 自己物語ワークシート

結果

本研究では、入学の経緯や学修の状況、今の自分自身、将来の自分という4つのテーマについてかなり膨大な資料が得られた。これらのデータのすべてを本論文のなかで分析することは煩雑になり、無理があるので、本論文では、今の自分自身に関する自己物語に焦点を絞って分析する。まず、今の自分自身についての自由記述の内容を分析した結果、表1に示すようなカテゴリーに分類された。

C1からC4は、今の自分自身に対する肯定的な記述やさらなる自己改善の願望であるが、こうした記述は1・2年生全体の20%から32%程度であった。

C5の「不足なところを直したい」は半数を超える。そして、その「直したい」不足な点として挙げられているC7からC10の「先が見えていない・迷っている」「感情が不安定・やる気が出ない」「自分らしくできていない・自分がわかっていない」「人との関係がうまくない」という記述は、1・2年生全体の13%から26%程度あり、さらにC7からC10に分類されない「その他の不足な点の記述」をまとめたC6の「自分のよくないところや不足なところの記述」は64%もあった。このように、自分の不足なところや直したいところを書く学生がのべ140%あまりもいるという点は、多くの学生が現状にあきたりず、改善の気持ちをもっていることを示しており、注目に値する。C11の「忙しい」は11%程度であるが、その中には、充

実している人もあれば(C2の記述もあり)、それで自分らしくなくなっている人(C9)、時間の使い方の悪い自分(C6)、そういう自分が嫌だ(C13)という人などがおり、多様である。

また、「うまくやれていないが、頑張っている」という記述が8%程度あるのに対して、「自分のうまくやれていないところが嫌い」という自己否定的記述が12%程度あった。

ただし、これらの記述はひとり1カテゴリーというわけではなく、ほとんどの場合、C11について先述したようにひとりの記述に複数のカテゴリーが含まれていた。そこで、次に、そうした複数のカテゴリーにわたる記述のパターンを多重応答分析によって分析してみた。

その結果、これらのカテゴリーの説明次元として2次元が抽出された。図4は、各カテゴリーのポイントを2次元の空間上に布置したものである。カテゴリーポイントは、各カテゴリーに関する記述のあるサンプルの次元上のスコアの重心を示している。なお、各カテゴリーの記述のないサンプルの重心は概ね原点付近に布置されているが、図が煩雑になるため省略した。次元の解釈に当たっては、一般に原点から遠くに布置されている特殊なカテゴリーに注目することになる。

そのような観点からまず次元1に注目すると、プラス方向に「自己否定・自分のうまくいっていないところ嫌い」「感情が不安定・やる気が出ない」「人との関係がうまくな

表1 「今の自分自身をどう思っているか」に対する記述内容のカテゴリーとその頻度

番号	カテゴリーの内容	頻度	%
C1	自分はこういう人(いいところや好きなどの記述)	55	26.4
C2	うまくやれている・頑張っている	67	32.2
C3	よくなってきている	42	20.2
C4	さらによくなりたい・理想の自分になりたい	49	23.6
C5	不足なところを直したい・変わりたい	110	52.9
C6	自分のよくないところや直したいところの記述(C7~C10以外)	134	64.4
C7	先が見えていない・迷っている	35	16.8
C8	感情が不安定・やる気が出ない	29	13.9
C9	自分らしくできていない・自分がわかっていない	54	26.0
C10	人との関係がうまくない	46	22.1
C11	忙しい・課題に追われている・余裕がない	23	11.1
C12	うまくやれていないが、頑張っている	17	8.2
C13	自己否定・自分のうまくいっていないところ嫌い	26	12.5
C14	自己受容・自分のためなところを含めて受容	15	7.2

い」「自分らしくできていない・自分がわかっていない」など、主として自分の内面に視点が向いて、何らかの活動を行おうという方向性が乏しく停滞感が窺われるカテゴリーが布置されている。

マイナス方向に「うまくやれていないが、頑張っている」「さらによくなりたい・理想の自分になりたい」「よくなってきている」「自己受容・自分のためなところを含めて受容」「忙しい・課題に追われている・余裕がない」などのなんらかの活動を行っていたりこれから活動を行おうとする方向性を持った表現のカテゴリーが布置されている。

したがって、次元1は、一応、外向きの活動性の低さを示しており、マイナス方向に「活動性」の高さを、プラス方向に「活動性」の低さ(停滞)を判別していると考えられることができる。

次に、次元2に注目すると、プラス方向に「自己受容・自分のためなところを含めて受容」「自分はこういう人(いいところや好きなどの記述)」「人との関係がうまくない」「よくなってきている」「うまくやれている・頑張っている」などの必ずしもうまくやれているとは言えないが、自分のためなところも含めて自己の状態や特徴について自分なりに捉えて受けとめ、説明出来ていることが窺えるカテゴリーが布置されている。

マイナス方向に「先が見えていない・迷っている」「うまくやれていないが、頑張っている」「忙しい・課題に追われている・余裕がない」「自己否定・自分のうまくいっていないところ嫌い」など自分についてよく把握できておらず、説明できていないことを示すカテゴリーが布置されている。

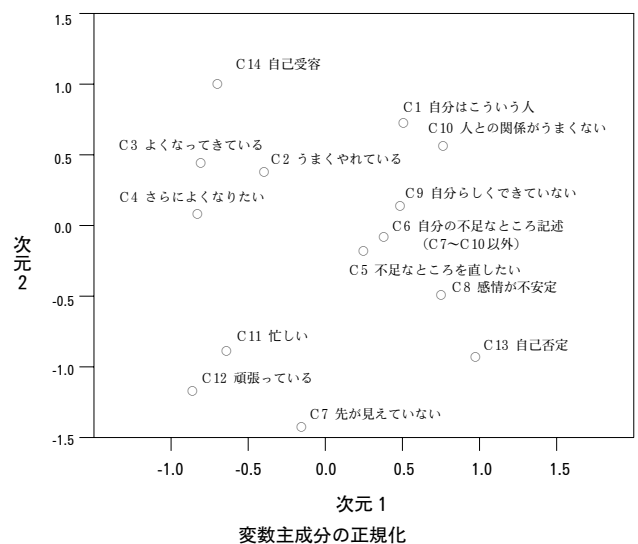


図4 カテゴリーポイントのプロット

したがって、次元2は、一応、現在の自分についての説明ができていないか、できていないかという「自己についての説明度」の違いを判別していると考えられることができる。

図5は、サンプルポイントをプロットしたものである。また、図6と図7はそれぞれ次元1、次元2のサンプルスコアの分布状況を示したものである。図5によると、サンプルは原点を中心に比較的偏りなく分布している状況がわかる。また、図6、図7もそれぞれの次元のサンプルスコアが正規分布に近い状態で分布していることがわかる。こうしたサンプルスコアの分布の状況から判断すると、次元1や次元2はなんらかの行動的次元もしくは心理的次元を反映していると推測される。

そこで、これら次元1と次元2がNEOの5つの尺度な

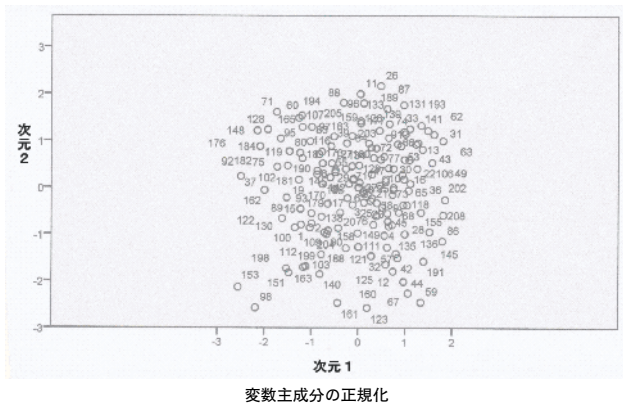


図5 サンプルポイントのプロット

らびにTEG IIの5つの尺度との相関係数及び無相関検定の結果を示したのが表2である。次元1とNEOのNとの間には、低い有意な正の相関がある。これは、自己の内面に注目して活動性が低く停滞しているということが、情緒不安定性の得点が高いことに関係していることを意味している。逆に見れば、活動性が高いということは、情緒不安定性の得点が低いことを意味している。これらのことから、活動性の高い人は、精神的に負荷がかかる状況下でもなんらかの行動をおこし対処することができるために、情緒的にも安定していただけるか、あるいは、情緒的に安定している人は、精神的に負荷がかかる状況下でもなんらかの行動に出ることができると考えられる。

また、次元2とNEOのNとの間には、低い有意な負の相関がある。これは、現在の自己についての説明度が高いほど、情緒不安定性の得点が低いことに関係していることを意味している。これは、自分のおかれている状況や自

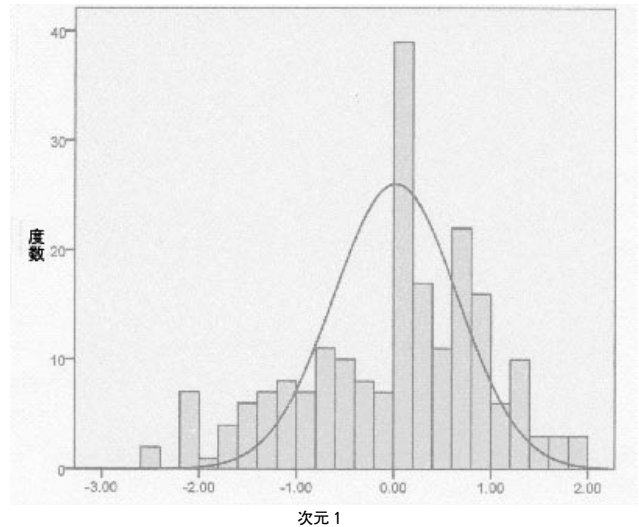


図6 次元1のサンプルスコアの分布

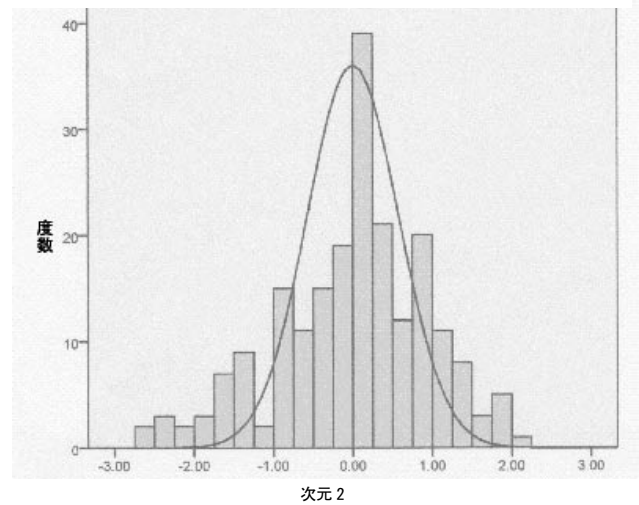


図7 次元2のサンプルスコアの分布

表2 次元1および次元2とNEOならびにTEG IIの各尺度との相関係数

多重応答分析の次元	1		2	
	活動性 (高い) ← → + (低い)		現在の自分についての説明度 (低い) ← → + (高い)	
NEO				
N (情緒不安定性)	.160 *		-.158 *	
E (外向性)	.050		.131	
O (開放性)	.021		.118	
A (協調性)	-.093		.133	
C (誠実性)	-.123		.010	
TEG II				
CP (批判的親)	-.111		.145 *	
NP (養育的親)	-.194 **		.197 **	
A (成人)	-.122		.073	
FC (自由な子ども)	-.109		.217 **	
AC (順応した子ども)	.046		-.009	

* p<.05 ** p<.01

分の特徴を自分自身で捉え、説明することができると、その状況にいる自分を理解し落ち着いて対処できることを示していると考えられる。

他方、次元1とTEGⅡのNPとの間には、低いが有意な負の相関がある。これは、NPが高い（「思いやり」「親切」「世話好き」「人への共感」「奉仕の精神」「弱いものをかばう」など）ほうが、活動性が高いことを意味している。

また、次元2はTEGⅡのCP、NP、FCとそれぞれ低いが有意な正の相関があった。次元2とTEGⅡのCPとの間の正の相関は、現在の自分についての説明度が高いほど「責任感が強い」「秩序を守る」「義理がたい」「個人の権利を守る」「信念を貫く」「ノーと言える」などとの関連があり、自分のやるべきことや自分なりの考えを持っていることが考えられる。

また、次元2とNPとの間の正の相関は、現在の自分についての説明度が高いほど、「思いやり」「親切」「世話好き」「人への共感」「奉仕の精神」「弱いものをかばう」などとの関係が高いことが示唆される。

次元2とFCとの正の相関は、現在の自分についての説明度が高いほど、「自由奔放で明るい」「好奇心があり、チャレンジ精神に富む」「直感的にものごとをとらえる」「活発で何事にも積極的」「創造性が豊か」などとの関連があることを意味している。

考察

本研究では、物語論的自己分析ワークシートが、1・2年の女子大生の自己分析のツールとして有用であるのかどうか、また、1・2年の女子大生のキャリア支援のツールたりうるのか、それが問われている。

今回、物語論的自己分析ワークシートに書かれた内容は非常に多くの内容に渡るため、本論文ではQ3の今の自分自身について書かれたことを中心に分析した。表1に示されたように、実に多様なカテゴリーが表出されており、1・2年生の女子大生の現在の自分自身に対する評価がかなり多様であることがうかがわれる。そのなかで5・6割の比較的多くの学生たちが自分のよくないところ・不足なところを書き、そこを直したいとしていた。このことは、学生たちが、自分が選択した進路や学修の中で自分に不足している点を自覚し、そこを改善していこうという気持ちを表現したものと捉えることができる。また、こうした分析ができるということは、彼らが自らの学修状況を軸に、自分のキャリアを展望していることを示すものであり、このワークシートがキャリア支援のワークシートとしてそれなりに有効であると考えられる。

多重応答分析の結果については、次元1や次元2の説明率がそれぞれ14.5%、10.8%、合計しても25.3%と概して

低かった。しかし、分散の説明力は概して低いものの、抽出された2次元が描き出したカテゴリーポイントの布置は十分意味があり、二つの次元のサンプルスコアとNEOやTEGⅡの心理尺度との相関は概して低いものの自己物語ワークシートの有用性を示していた。

次元1は、活動性を判別する次元と解釈され、NEOやTEGⅡの心理尺度との相関分析の結果、活動性の高い方が情緒的に安定しており、養育的な親の傾向（「思いやり」「親切」「世話好き」「人への共感」「奉仕の精神」「弱いものをかばう」など）が高い傾向のあることが示された。このことは、人のためにという思いの強い人は自然と活動性が高くなる可能性があること、また、活動している方が、動かずに自分の弱い点に目を向けている場合よりも情緒的に安定するという可能性が考えられる。

また、次元2は現在の自分についての説明度を判別する次元として解釈され、NEOやTEGⅡの心理尺度との相関分析の結果、現在の自分についての説明度の高い方が情緒的に安定しており、批判的親のプラス傾向（「責任感が強い」「秩序を守る」「義理がたい」など）、養育的親のプラス傾向（「思いやり」「親切」「世話好き」など）、自由な子どものプラス傾向（「自由奔放で明るい」「好奇心があり、チャレンジ精神に富む」など）とはそれぞれ正に関連していることが示された。これらのことから、現在の自分について理解し、自分らしさを具体的にわかっていることは、自分が何をすべきか、自分が何をすればよいか、自分が何をしたいかを思考していることと関係し、情緒的安定をもたらすのではないかと推測される。

このようにまったくの自由記述の中から得られたカテゴリーから抽出された次元でありながら、パーソナリティ検査との間に意味のある相関が得られたということは、自己物語の背景にパーソナリティ特性や独自の適応スタイルが影響しているためと考えられる(McAdams & Pals, 2006)。したがって、自己物語ワークシートはパーソナリティのひとつの表現であるという本研究の仮説は一応、支持されたと言えよう。

また、図5から、活動性の高さや現在の自分についての説明度の高さが中庸を得ているものが多数を占めているが、典型的には「活動性や現在の自分についての説明度がともに高いタイプ」「活動性は高いが現在の自分についての説明度の低いタイプ」「活動性は低いが現在の自分についての説明度の高いタイプ」「活動性や現在の自分についての説明度がともに低いタイプ」などの存在が示唆される。したがって、自己物語論的自己分析ワークシートは、その記述から活動性や現在の自分についての説明度の低い学生を発見し、適切な教育的支援を与える上でもそれなりに有用であると考えられよう。具体的には、次元1の活動性が低い学生に対しては、何らかの行動を伴う提案をすること

が、支援のひとつになりうると考えられるし、次元2の現在の自分についての説明度の低い学生に対しては自己の認識を深めるように働きかけることが、もうひとつの支援の方向になると考えられるかもしれない。

今後の課題として、本研究では、「今の自分自身」に関する自己物語に絞って分析したが、「大学・学科への入学の経緯」「現在の学修状況」「将来の自分自身への期待」などへも分析を広げ、それぞれと「今の自分自身」との関連性についても分析を進めていきたい。なお、次元1、次元2ならびにNEOのN、TEGⅡのAなどに学年差があった。この点に関しても、それが大学生としての心理的成長の証であるのか、たんなる学科の違いによる差であるのか、今後さらに検証してみる必要がある。

謝辞

本研究にあたり、西村純一と平澤尚孝がアメリカの大学のキャリアセンターの自己分析ツールの活用状況について視察を行った。その際、バーナード大学キャリア開発センター所長Robert Earl、ウェルズリー大学仕事とサービスセンター副所長Folly Patterson、アメリカン大学キャリアセンター所長Katherine Stahlならびに副所長Susan Gordon、ジョージタウン大学キャリア教育センター副所長Elizabeth Livingston、カルフォルニア大学バークレー校キャリアセンター所長Thomas Delvin、スタンフォード大学キャリア開発センター所長Lance ChoyならびにJohn Krumnoltz教授など多くの方々から数多くの貴重なご教示をいただいた。また、通訳の笠原塩見氏にはたいへんお世話になった。記して謝意を表する次第である。なお、本研究は、東京家政大学地域共同研究支援によって行われた。

文献

- 有馬明恵 2007 内容分析の方法 ナカニシヤ出版
- 榎本博明 2008 自己物語から自己の発達をとらえる 榎本博明(編)自己心理学2 生涯発達心理学へのアプローチ 金子書房 pp.62-81.
- 榎本博明 2009 パーソナリティの物語論的把握 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也(著)パーソナリティ心理学 有斐閣アルマ
- Havighurst, R.J. 1953 *Human development and education*. Longmans, Green & Co., Inc. New York.
- R. J. ハヴィガースト(著) 荘司雅子(監訳) 1995 人間の発達課題と教育 玉川大学出版部
- Havighurst, R.J. 1972 *Developmental tasks and education* (Third edition). David McKay Company Inc. R.J. ハヴィガースト(著) 児玉憲典・飯塚裕子(訳) 1997 ハヴィガーストの発達課題と教育 川島書店
- 石井貞夫 2001 S P S Sによるカテゴリカルデータ分析の手順 東京図書
- 柏木繁男 1997 性格の評価と表現：特性5因子論からのアプローチ 有斐閣ブックス
- McAdams, D.P., & Pals, J.L. 2006 A new Big Five: Fundamental principles for an integrative science of personality. *American Psychologist*, **61**, 204-217.
- 東京大学医学部心療内科TEG研究会, 2006 新版TEGⅡ 解説とエゴグラム・パターン 金子書房
- 辻平治郎 1998 5因子性格検査の理論と実際 北大路書房
- 渡辺三枝子 2009 大学生のキャリア, なぜいま支援が必要か 教育学術新聞 平成21年10月21日

Abstract

For the present study, we prepared a self-assessment tool from the viewpoint of a narrative theory, and examined its usefulness. Also, we examined the hypothesis that a self-narrative is the expression of personality. For this purpose we carried out a survey using a self-narrative worksheet consisting of descriptions of the details on the entrance to college, the present status of the curriculum, the present and future selves, etc., for 208 freshmen and sophomores of the women's college. Among these items, we made a content analysis of the description particularly related to the present selves, and produced categorical data. Using multiple-correspondence analysis, we analyzed the data, from which we extracted 2 dimensions: Dimension 1 was the level of activities, and Dimension 2 was the level of explanation for present selves. Furthermore, Dimension 1 showed a significant correlation between N of NEO and NP of TEG II, while Dimension 2 revealed a significant correlation between N of NEO and CP, NP, FC, etc., of TEG II. From these results, the hypothesis that the self-narrative was an expression of personality was confirmed, and at the same time the narrative worksheet proved useful as a self-assessment tool for career support.